

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第49巻6月号(通巻599号)

風土



6

祭
笛
神
蔵
器

あをによし奈良の仏と花菜漬

光の環一つ一つに蓮はちすの芽

野のはてに買ふ母子草父子草

生真面目に多情多恨の柿の花

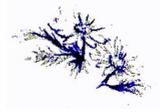
鏡自体鏡うつさず牡丹咲く

たんぽぽや戒名を朱に墓の建つ
寺に用ありて竹の子流しかな
まだ眠る力のありて目借時
桜葉降る三代の小学校
燕来る地下に電線電話線
夏に入る魁夷の道を立てかけて
青鷺の脛すねの吹かるる祭笛



竹間集

同人作品



吊し雛

門伝史会

畦伝ふ北條の里蛸蚪の水
葦山北條殿に雀の鉄砲吹き鳴らす
紅梅の花びら浮かべ産湯井戸
玉眼の運慶仏や地虫出づ
啓蟄江戸郡や三和土より立つ生き柱
辛夷咲く明治商家のなまこ壁
張りつめし心のゆるむ吊し雛

「淡交」以後(六)

野沢しの武

食けのもの買ひ防災の日の妻帰る
秋風や山門に置く塵取具
考へることあり黙つて葡萄食ふ
どぶろくに酔ひ反骨のすでに無し
零余子飯母の命日なれば欲る
槻の木を離れ全きけふの月
ほほづきを鳴らすことなく逝きし吾子

山笑ふ

鈴木石花

入山の僧待つ寺領水草生ふ
かたかごや烏頭子選の句会報
天国の師より文あり風光る
感涙に噎びし文や春の星
冴返る山従へて富士現るる
逆上がり出来る子できぬ子山笑ふ
暖かや塀に立掛く猫車

卒業子

山路 紀子

春光や菰外されし松の幹
雪形の馬駈け下る田面かな
常念ヶ岳や春の靄立つ荒鋤田
春宵の湯宿にかかる高座かな
蝌蚪生る貧しき頃の子沢山
竹林のそこだけ揺れて山笑ふ
卒業子母と離れて歩きけり

鳥雲に

岩木 茂

橋立は神の通ひ路浅蜷舟
朝東風や「水越岩」に潮の香
霾や書架より抜いて三国志
囀りや野外音楽堂の椅子
忌仕度の硯の海の朧かな
ちちの墓そのちちの墓鳥雲に
むかはりの墓に提げゆく春の水

月おぼろ

相沢有理子

春の風邪誰も来ぬ日の万華鏡
かげろへる地表や竿竹売りの声
春霖のやうやく上がり香草摘む
婿殿の手すさびの笛月おぼろ
森うらら若者に椅子譲らるる
リラ香る僧院の庭整へり
楽器抱く少女の胸に散るさくら

三 月

中谷葉留

啓蟄や羽毛をのせて川流れ
春時雨薬草園の中に佇ち
ふるさとの身幅の堤亀鳴けり
からたちの棘三月の鋼なす
初蝶の水かげるふと揺れにけり
蝌蚪一つ動きとりどりうごき出す
子になじむ亡夫の革ジャン鳥曇

佐吉双六

— 小野寺節子 —

旅情追ふ春や野ざらし芭蕉道
花の雲橋の袂でたたら踏む
旅人の春よ京みち道しるべ
花鳥やここは野ざらし芭蕉道
木曾大橋わたる平成^{びと}の春
野に畑に暮しに花菜明りかな
孝子仏の「佐吉双六」花吹雪
昔に今に佐吉は生きて春を呼ぶ
仏佐吉の「至孝」「報恩」うららし
暮春恋ひ追ふは佐吉のころざし

山河集

同人作品



神蔵
器選

鳥帰る海にのこせる笑窪かな
工藤はるみ

雀の子土に触るれば跳ねもして

山茱萸の花の雫の黄金に

春の月富貴寺の裏の木の間より

農継がぬ子に送るかな花辛夷

玉湯川瀬音かすかに花六分
杉本薬子

蜆汁宿の女将の長口上

混浴の風呂に人気なく花の影

花曇八雲の椅子の長き足

花冷の路地より見ゆる八坂の塔

牡丹の芽短かく天と向かひあふ
生田 作

雲雀東風山すそに日の戻りたる

竹幹に日の斑生まるる涅槃西風

三叉路の現場検証山笑ふ
玄関の引き戸砂噛むよなぐもり

大寺の奥津城どころ山椿
奥山 絢子

春時雨おもはぬ人と会ひにけり

益荒男は遥けきものよ大石忌

春塵や懈怠に御座す吉祥天

ちりぢりにやがて揃ひぬ雀の子

引き潮や何を啄む春鷗
島 玲子

鱈干すポストひとつの島ぐらし

さざ波や出船入船風光る

淡島の彼岸も近き海明かり

百年のムンクの叫び春の雷

◇特別作品◇(抄)

川越へ

竹生田勝次

川越のそびらに霞む秩父かな
川越に入る街道のかげろへり
鶯や鎮守の杜へ通りやんせ
蔵の街バスも抜けゆく燕かな
時の鐘仰ぐ小路や鳥雲に
椿落つ「どろぼう橋」の底へかな
初桜羅漢の唇がひらきけり
花冷や猪首の父に似し羅漢
永き日のお不動様に蚤の市
川越はわがとなり街月朧

風土独語／神蔵器



鳥帰る海にのこせる笑窪かな

工藤はるみ

津軽外ヶ浜で、雁が北に帰った後、浜辺に落ちていた木片を拾い集めて風呂をたくという伝説がある。渡来して来た雁が、日本にいる間に捕えられたり、不慮の死によって、渡来して来た時に使用した木片を、再び使うことがなくなってしまった雁の死を悼み、供養のためという。

作者は海辺に立つて、はるか北方へ帰る渡り鳥を見送っている。渡り鳥は、その鳥の種類にもよるが、多くは中春の頃に、いく度か飛び発つ訓練をしながら、棲息地の上空あたりをぐるぐるめぐって、一羽のもれもないように家族ごとにかたまり、隊形を整える。そして日本海の上空に出るあたりでは大群をなし、一糸乱れず一路北を目指して飛び、みるみる水平線の彼方、茫茫たる雲の中へと消えてゆく。

「あの鳥たちは、はたして無事にみな北の古巣に帰りつくだろうか」、急に目頭が熱くなった。

やがて、われに返った作者の眼前に灰色がかったあおい海原がひらけ、砂浜に寄せるさざ波の中に白い波紋が幾つも立っていた。鳥たちののこした笑窪のように…。

花曇八雲の椅子の長き足

杉本葉子

松江の小泉八雲旧居か、ほど近い八雲記念館での作であろう。記念館には私はまだ行っていないが、旧居の書齋がそのまま復元されているとのことである。

ところで、この句を秀句に押し上げ、包みこんでしまったのは「花曇」と言う季語の素晴らしさであることは申すまでもないが、直接的には人に気付かなかったもの「椅子の長き足」の発見であり、その発見が作者の心中にある小泉八雲の人と生活のうちに把握されていることである。極端な言い方をすれば「椅子の長き足」はイギリス人ラフカディオ・ハーン、日本に帰化、日本を愛した小泉八雲その人とも言えるであろう。

八雲の日本での日常について

「八雲は平生特別に高く作った机の上でランプの光で著作し、時々椅子から離れては座蒲団の上に行儀よくすわって、百本ほどもあった長い煙管の一本を抜き出し、楽しそうにからだを揺すりながら吹かすのであった。煙草盆の火がなくなった時には、机の上に置いてあった大きな法螺貝を喜んで吹いて夫人に知らせたという」(世界人物事典より)

松江の八雲旧居は日本家屋、書齋も当然畳の部屋であった。旧居の玄関前に三十センチばかりの小さな句碑

くはれもす八雲旧居の秋の蚊に
虚子

風土集



神蔵器選

鯨干す軒端づたひに日本海 高槻 浅田 光代

つちふるや頭ゆらさぬやう歩く
長考の午後となりたる椿かな
つばめ来る胡椒少々塩すこし
雀の子東寺の庭に吹かれ跳ぶ
白魚の水とばしつつからるる
表札のなきアパート群蠶れり
東京 柿沼 盟子

三つ揃ひ着込み蛙の目借時
半分に削る文章春の雨
山吹や日の匂ひ濃き木のベンチ
春月を産みて鎮まる東山 京都 杉本葉子

卒業に揮毫頼まるる桜かな
銀杏の芽枝に力を吹き込みぬ
散る花の白川に立つ鷺の脛
田螺鳴く箸立ての箸隙間なく

猫柳遙かな音を近寄する 上尾 根岸 善行

地下鉄の一番出口初桜
あたたかや切つて木の香に包まるる
暖かや島のせて海ふくらみぬ
朝靄の奥より大河柳の芽
風の吹く牧のうちそと土筆生ふ
啓蟄や首を廻せばコキと言ふ
三代の日本画展に日永かな
撥ねし枝撓めて垣を繕ひぬ
さざなみは角組む蘆の子守唄
花疲れ小町通りを逸れてより
川崎 須藤美智子

鎌倉彫一枚看板黄沙降る
ひとつづつ太陽をおく潮干潟
長八の鍔絵の冴えや雀の子
こゆるぎの浜より晴るる春時雨
山本 浪子